

令和4年(2023年)度 教員による学校評価（自己点検・自己評価）最終評価

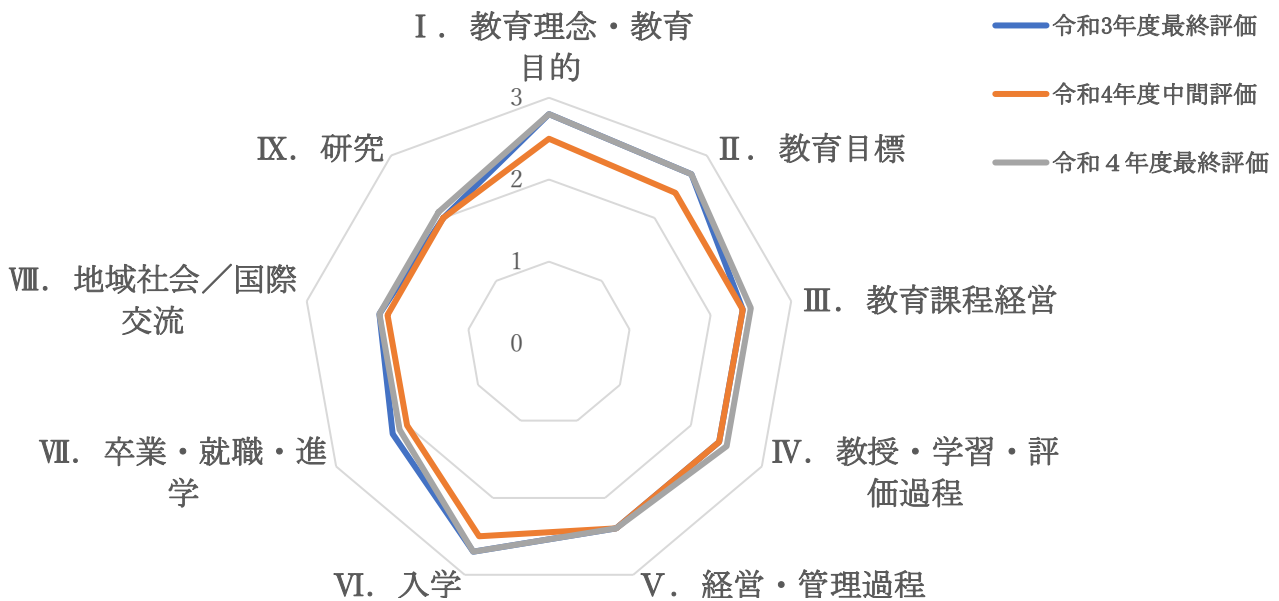


図1 令和4年度 教員による自己点検・自己評価最終

表1 令和4年度 教員による学校評価(自己点検自己評価)最終

評価カテゴリー	令和4年度 中間評価(9月)	令和4年度 最終評価(3月)	令和3年度 最終評価(3月)
I. 教育理念・教育目的	2.5	2.8	2.8
II. 教育目標	2.4	2.7	2.7
III. 教育課程経営	2.4	2.5	2.4
IV. 教授・学習・評価過程	2.4	2.5	2.4
V. 経営・管理過程	2.3	2.4	2.4
VI. 入学	2.5	2.7	2.7
VII. 卒業・就職・進学	2.0	2.1	2.2
VIII. 地域社会／国際交流	2.0	2.1	2.1
IX. 研究	2.0	2.1	2.0
平均	2.3	2.4	2.4

*評価基準 3:十分満たしている 2:満たしている 1:改善の余地がある 0:改善すべきである

1. 全体的結果 (図1、表1参照)

令和4年度中間評価と比較すると、I～IXカテゴリーすべて、0.1～0.3 上昇した。また、令和3年度最終評価との比較では、ほぼ同程度の結果となっている。

令和4年度最終評価において、全9カテゴリーの平均は2.4であり、「概ね満たしている」という結果であった。

2. 項目別の評価結果の分析と対策

1) 「I. 教育理念・目的」(小項目8項目) 「II. 教育目標」(小項目7項目)

令和4年度中間評価に比べ0.3 上昇している。昨年度、新カリキュラム申請のために教育目標、教育内容等検討した。新カリキュラムは令和4年4月から運用開始しており、新カリキュラムの2.3年次の科目の教育内容をさらに継続して検討したため、令和3年度最終評価同様のポイントに上昇したと考える。

2) 「III. 教育課程経営」(中項目7. 小項目31) 「IV. 教授・学習・評価課程」(中項目4. 小項目15)

令和3年度最終および令和4年度中間評価より0.1 上昇した。新型コロナウイルス感染対策や感染予防に伴う講義及び実習教育の教育方法の工夫等の取り組みは3年目となり、講師や実習指導者と連携をとり、教員間での調整や検討を継続したためと考える。また、学生の主体的な学びや学生の学習が深化するための授業・教授方法について取り組んだためと考える。

(1) 講義・演習教育について

①令和4年度入学生は新カリキュラムが適用され、思考力・判断力を強化するために自己学習を基盤とした授業の展開を強化している。専門基礎科目として新設した科目「看護薬理」では、解剖生理学、疾病論、薬理学の既習知識を活用した薬物療法を受ける患者の看護について講義・演習を実施した。また、看護過程の展開やベッドメイキング、寝衣交換、洗髪などの日常生活援助技術を組み合わせた「臨床判断演習」を実施し、臨床判断能力の基礎強化に向けた教育を実施した。

②学生からの中間評価では「復習する時間の確保が難しい」「演習時間内だけでは、十分な技術が正しく身につけられない」との反応があった。後期は、自己学習を基盤とした授業や既習知識の活用について理解し、「看護を考える時に、そもそも解剖生理が理解できていなかったが、授業を機に分からなことが分かるようになった」「予習で学んできたが完全に理解できていなかったところも授業のまとめで点と点がつながったような気がして面白かった」などの反応があり、自己学習力の強化につながったと考える。

③教育の質の向上のため研究授業以外にも、今年度は看護技術のデモンストレーションを効果的にするために学生の視覚的理解が高まるよう教員間で検討した。また、デモンストレーションをiPadで録画し学生がいつでも確認し自己練習できるようにした。その結果、自主的に技術練習をして演習に臨むことができた。

(2) 実習教育について

①令和4年度臨地実習の状況では、約76%が臨地での実習を行うことができた。臨地での実習では、実習指導者と連携し、学生の看護実践能力の強化に取り組んだ。実習前の事前学習の確認や発問、カンファレンスを活用して知識の定着を図り、看護実践については、学内での看護技術の事前確認や看護実習場面における指導を強化した。

②実習指導の円滑化と質的向上をはかるため、実習内容や指導方法の検討および意見交換

を実施するなど、実習施設との連携を強化した。特に、今年度は実習指導者会議で「臨床判断能力向上のための学生の気づきを活かした指導」の学習会を企画し、実習指導者が「学生の気づきを活かした指導」に取り組んだ事例を共有し、実習指導方法について理解することができた。

③学内実習の場合は、学内実習指導計画・指導案を作成し、教員（教務助手）が患者役となり、学生は立案した介入計画に基づく看護実践場面で指導を行った。また、実践場面を通してグループメンバーと意見交換し、評価に反映させることができた。また、実習施設からの施設情報や患者情報提供や、指導者の学生カンファレンス参加等、実習指導を強化した。

④学生によって臨地実習経験の状況が異なっていたため、教員間で学習状況を把握し、情報を共有しながら学習支援を行った。また、実習施設との調整および実習指導者と学生の学習状況の共通理解、指導の連携を行うことで、学生からは、「自分が考えられていなかった視点の指導をもらうことができた」「看護師に声掛けのタイミングや困ったことをサポートしてもらい、やりとげることができた」「様々な相談に対して、指導してくれた」等の反応があった。

⇒実習教育全体として、看護実践能力や臨床判断能力の強化、家族看護の強化、コミュニケーション力の強化は次年度に向けて継続した課題となる。

(3)行事等の開催・内容等の検討

令和4年度入学式はコロナの状況により1家族1名の保護者参加のみの縮小開催であったが、後期の誓いの式は感染者の減少傾向を確認し、来賓を招いての開催、卒業式は3年ぶりに全学生、保護者、来賓を招いて開催することができた。

(4)ICT活用に向けた授業設計

九州内の国立病院機構附属看護学校5校が連携し、「地域連携」「多職種連携」「臨床判断」「シミュレーション教育」のテーマで授業内容、教授方法を検討した。夏季教員研修会で実践に向けた検討および進捗状況の報告を実施した。当校では、「臨床判断」の内容・教授方法を踏まえ、3月に1年生を対象に演習を実施した。

⇒次年度も九州内の国立病院機構附属看護学校と連携し、検討を継続する。

(5)その他

小項目「授業準備のための時間確保」については、昨年度と同様に低い評価であった。「時間管理が不十分」「ゆとりがない」などの意見がある。令和3年度より勤務時間管理教員が中心となり業務改善を検討実践しているが成果につながっていない。令和4年度は教員1名が欠員となったことや病気休暇等でマンパワーが不足したことが一因と考える。

⇒「授業準備のための時間確保」ができるよう、教員間の協力体制、連携を強化し支援する。

3)「Ⅶ. 卒業・就職・進学」(小項目5項目)

①九州内の国立病院機構附属養成所5校の副学校長、教育主事で機構に就職した卒業生の看護実践力についてデータをとり研究発表した。しかし、国立病院機構以外に就職した学生のデータは不十分である。

②今年度は、卒業時の到達について調査しているが、学内実習が多く、分析までに至っていない。

⇒看護実践能力の現状と課題について、国立病院機構および県内の学校との意見交換、県内施設からの情報を得て、今後の教育に活かしていく。

4) 「IX. 研究活動」(小項目3)

令和4年度最終評価結果は2.1で「満たしている」という結果だが、研究活動が継続せず研究発表につながっていない。中間評価では「研究活動の体制はあるがうまく活用できていない」「今後、毎月半日でも研究時間を確保し取り組む」などの意見があった。後期、研究日取得に向け働きかけたが、講義や実習指導が優先され、研究活動体制を活用することができていない。

⇒研究日を確保し、研究活動に取り組めるよう、教員間の協力体制、連携強化を支援するとともに、時間単位の研究活動や事前申請の期限などを柔軟にしていく。

令和4年（2023）度 学生満足度評価（最終）

表1 令和4年度 学生満足度 最終評価（令和3年度と令和4年度の比較）

評価内容	令和3年度（最終）			令和4年度（最終）			平均	
	1年生	2年生	3年生	1年生	2年生	3年生	令和3年	令和4年
I. 教育理念・目的・目標について	4.3	3.8	4.2	4.2	4.1	4.0	4.1	4.1
II. 教育活動について	4.3	3.8	3.9	4.2	4.2	4.0	4.0	4.1
III. 学校外の施設や人材の活用について	3.6	3.2	3.7	3.2	3.3	3.7	3.5	3.4
IV. 教員組織について	3.3	2.9	3.8	3.2	2.9	3.9	3.3	3.3
V. 施設・設備に関すること	3.9	3.4	3.8	3.5	3.7	3.7	3.7	3.6
VI. 管理運営・財政に関すること	3.4	2.8	3.6	3.1	3.1	3.6	3.3	3.3
VII. 健康に関すること	3.7	3.6	3.9	3.8	3.5	3.9	3.7	3.7
平均	3.8	3.3	3.8	3.6	3.5	3.8	3.6	3.7

*評価基準 5:大いにそう思ふ 4:そう思ふ 3:どちらとも言えない 2:あまり思わない 1:まったく思わない

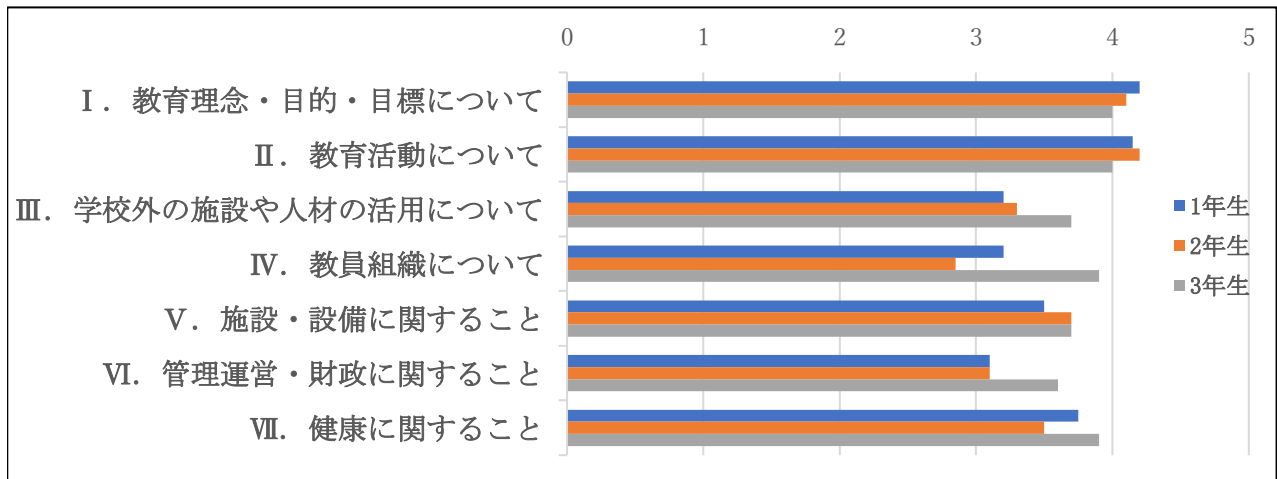


図1 令和4年度 学生満足度 最終評価（学年別の比較）

- ①令和4年度全カテゴリーの平均は3.7点であり、令和3年度と比較し0.1点の上昇が見られた。また、全てのカテゴリーは3.3点以上であり「概ね満足している」という結果である。
- ②全カテゴリーの平均を学年別にみると、3年生が3.8点と、1.2年生に比べ高い結果となっている。3年生は3年間の最終の満足度評価をしており、総合的に見て卒業時の満足度が高くなっている。
- ③カテゴリー別で見ると、「IV. 教員組織について」2年生の評価が2.9点であり、令和3年度同様低かった。また、1.3年生に比べても低い結果となっている。令和4年度3年生は、学生数が98名と多かったにもかかわらず、3.9点と高い評価となっている。これは、実習指導や国家試験に向けた学生個々に合わせた指導、進路指導等の対応に学生が満足している結果と考える。また、3年生の指導は学年担当のみならず、実習や国家試験に向けた指導は全教員で取り組んでいることから、学生の満足度につながっていると考えられる。2年生は、日々の学習や自治会活動等、主体的な行動を求められる場面が多いが、「(教員に)相談したいときに教員が忙しそうにしており相談しにくい」などの意見があり、教員からのタイムリーな支援を希望していると考えられる。また、「同じことを何度も聞かれる、連携不足」「先生によっていうことが違う」「(課題の提示や放課後の連絡等)急に言われることがあり、困る」などの意見もみられた。
⇒学生に関する情報共有、タイムリーな支援、学生への指示内容の共通理解等教員間の連携を強化する。